

一九世紀中葉、華南沿海秩序の再編

——イギリス海軍と閩粵海盜——

村
上
衛

はじめに

第一章 アヘン戦争と海賊の勃興

(一) 清朝の沿海支配の動搖とアヘン戦争

(二) 開港と海賊の勃興

第二章 海賊への對應——清朝とイギリス海軍

(一) 清朝の對應

(二) イギリス海軍の登場

第三章 福建人海賊の衰退と廣東人海賊の臺頭

(一) 閩粵沿海民の反亂と福建人海賊の退場

(二) 廣東人海賊の臺頭

(三) 廣東人海賊の問題

第四章 イギリス海軍と地域秩序の回復

(一) 清朝地方官とイギリスの地域的提携

(二) 地域秩序の確立

おわりに

はじめに

一八四二年七月二十四日、南京條約の締結により、アヘン戦争は終結した。しかし、その戦火の最中、南シナ海沿海地域では、福建・廣東人を中心とする海賊が勃興し、南京條約によって開始された開港場交易に對する大きな脅威となった。しかしながら開港後の海賊に對する研究者の關心は乏しく、その研究も明末清初期（後期倭寇・鄭氏）や嘉慶の海寇と比較して極めて少ない。當該期における海賊問題についての最初の本格的な研究はフォックスの研究であり、イギリス海軍による海賊鎮壓活動を強調している。⁽¹⁾その他に、フェアバンクが開港直後を扱った古典的名著の中で、開港後における沿海部の混亂の事例として寧波を中心とする海賊を詳細に取り上げたほか、⁽²⁾概説書などで一部當該期にふれる研究はあるものの、⁽³⁾正面から海賊問題を取り上げた專論はほとんど存在しない。當該期の沿海部については、むしろアロー戦争に至る中英關係を中心とする政治外交史の中で議論されてきたといえる。

これらの研究のかかえる問題としては、明清史（前近代史）と近代史の斷絶がある。ほとんど全ての研究が、開港直前の沿海の状況を理解していないため、開港後の海賊の歴史的位置づけができず、當該期の變動の意義も明らかでない。

また、當該期におけるイギリス海軍の活動についても、外交史のアプローチから「イギリス」對「中國」という枠組みを前提とした「砲艦政策」が強調される傾向にあり、その他の側面が捉えられていない。

史料の面でも、イギリスまたは清朝中央のどちらか一方のみの史料を使用することが多く、視點が限定されているという問題がある。そのうえ、當該期の史料の記述が斷片的であるため、海賊活動の全體的な變動を把握できない傾向にある。以上の問題を考慮して、本論では研究の大幅な空白を補うとともに、沿海の長期的な歴史の中に一九世紀中葉の海賊を位置づけることを目指す。具體的には第一章ではアヘン貿易からアヘン戦争を経て一九世紀中葉の海賊に至る過程を解明し、第二章では海賊に對する清朝とイギリス海軍の對應とその影響、第三章ではイギリス海軍による掃討開始後の福建人

海賊と廣東人海賊⁽⁴⁾の状況の相違、第四章では清朝地方官僚とイギリス領事・イギリス海軍による地域的な秩序回復への試みを検討することとする。

対象地域としては、歴史的に中國沿海の海賊活動の中心であり、かつ先行研究がほとんど扱っていない福建南部（閩南）を取り上げる。史料としてはイギリス外交文書やイギリス海軍省文書などの英文史料を中心とし、⁽⁵⁾清朝側檔案などの漢文史料を併用する。

第一章 アヘン戦争と海賊の勃興

（一）清朝の沿海支配の動搖とアヘン戦争

本論を進めるにあたって、清朝統治下の沿海秩序について簡単にふれておきたい。清朝の統治における沿海秩序の中心は貿易管理と治安維持にあると考えられるが、これは一六八三年に臺灣に據る鄭氏が降伏したことによりはじめて實現することになった。

鄭氏が降伏すると、清朝は海禁を解除すると同時に、貿易管理のために東南沿海諸省に海關を設置した。そして海關では牙行が貿易管理と徴税を請け負っていくこととなる。⁽⁶⁾さらに、對東南アジア貿易・臺灣貿易は廈門、對ヨーロッパ貿易は廣州という形で特定の貿易港に貿易を集中し、一定程度の關税を確保していくことが重視された。

一方、治安の側面をみると、鄭氏のような反清武裝集團は消滅したものの、沿海部においては恒常的な海賊活動が福建人、廣東人を中心として行われていた。⁽⁷⁾これは間接的に清朝水師の治安維持活動が限定的であることを示している。

以上のように、清朝の目指す沿海における貿易管理と治安維持は、一定の税を確保し、沿海で清朝支配を脅かす勢力を發生させないことが重要であり、その他の面についてはゆるやかな統治が行われていたとみてよい。

地圖：華南沿海地域



出典：譚其驤主編『中國歷史地圖集』（中國地圖出版社，1987），5-6頁。

この清朝の秩序の治安面における崩壊の端緒が、一八世紀末から一九世紀初頭にかけてベトナムから浙江沿海に至る海域において発生した嘉慶の海寇である。清朝は招撫政策によって海賊を水師に取り込むことにより、かろうじてこれを抑え込むことに成功した。⁽⁸⁾

貿易の面では、閩南の小港への貿易の分散化によって一九世紀初頭には廈門における貿易管理体制が崩壊していた。さらに嘉慶海寇の沈静化と同時期に、南シナ海沿海部では福建・廣東沿海民によるアヘン貿易が拡大し、東南沿海の小港に拡大した。これに對して清朝は牙行を通じたアヘン取り締まりを試みたが、それは牙行を介さない零細化した取引を増大させ、結果として一層の貿易の分散化と小港における貿易の拡大を招き、清朝の貿易管理体制の崩壊に至った。⁽⁹⁾ 中國人の貿易を統制することができない清朝は林則徐を廣州に派遣し、彼が外國人商人所有のアヘンを沒收したことが契機となりアヘン戦争が勃発する。

アヘン戦争は清朝の一方的な敗北が続いたが、その中で沿海の大官達は敗戦の責任を「漢奸」に轉嫁した。その結果、漢奸とされた人々、すなわち福建・廣東沿海民に對する對策が講じられ、團練の編成や港灣封鎖（封港）が行われたが、これは失敗に終わった。そして沿海では海賊の活動が活性化しつつあり、清朝は、貿易管理も治安維持もできなくなっていた。⁽¹⁰⁾ここに、清朝の下での沿海秩序は完全に崩壊したのである。

（二）開港と海賊の勃興

アヘン戦争後に五港が開港する中で、沿海部で勃興した海賊が問題となる。ここでは、福建海域における海賊の構成を概観したうえで、當該期における海賊發生の原因について考えてみたい。

まず、海賊の構成員であるが、閩浙總督劉韻珂は次のように述べる。

思うに福建省の漳州・泉州などの府は沿海に位置し、風俗は凶暴で頑迷なことをたつとび、そのなかで無業のやからは往々にして海に出て盜賊となります。そして泉州府馬巷廳所屬の陳頭、柏頭などの郷は、とりわけ盜賊の集結場所となっています。當該の匪徒はいつも春夏の變わり目になると、往々にして魚を捕るといふ名目で無賴を集めて、船舶と武器をととのえ、分かれて福建・浙江の各洋におもむき、いたるところで略奪を行い、冬になると、おのおのの祕かに巢窟に歸ります。（こうしたことは）久しく受け繼がれており、ほとんど習慣同様になっています。⁽¹¹⁾

ここから、閩南沿海の漁民が季節的に海賊行爲を働くことがうかがえる。

福建水師提督寶辰彪も、漳州、泉州、興化府などの沿海居民はおおむね漁業を職業としていて、利益を得ていればみな良民であるが、利益を失えば盜賊になるとしており、不漁の際に漁民が海賊化しているとしている。⁽¹²⁾また、福建水師提督鄭高祥は利益のあがないない漁民に加え、失業した水手も盜賊になるとみなしている。⁽¹³⁾以上から、漁民・船員などの低い階層に屬する沿海民達が海賊化していることが分かる。⁽¹⁴⁾こうした構成はやはり漁民・船員が中心であつた嘉慶海寇と同様で

あり、開港前のアヘン貿易に積極的に参加し、かつアヘン戦争中に漢奸とみなされて取り締まり対象になった人々とも重なる。⁽¹⁶⁾

海賊の出身地をみると、例えば、一八四七年七月一日に福建沿海で逮捕された海賊の籍貫が福建の同安、馬巷（柏頭）、晉江、南安、福清、惠安、廣東の嘉應州に及んでいたように、⁽¹⁷⁾ 閩南を中心とした福建人と廣東人からなる集團が海賊を形成していた。さらに後述するように海賊集團にはポルトガル人、イギリス人、アメリカ人などの歐米人も参加しており、福建・廣東人および歐米人から構成される多様な集團であったことが分かる。このような歐米人の参加は、アヘン貿易以來の福建・廣東人と歐米人の關係をうかがわせる。

それでは、なぜこうした人々から構成される海賊が當該期に勃興したのであろうか。その背景としては貿易の擔い手の變動が考えられる。特に、從來福建・廣東人が擔ってきた中國沿海貿易に、上海以南に限られていたとはいえ歐米船が参入し、中國—東南アジア航路においても歐米船の役割が増大していたことが重要であろう。⁽¹⁸⁾ これに加え、開港當初貿易量が擴大しなかったため、福建・廣東船の役割は相對的に低下し、失業した船員が海賊活動を行った可能性は高い。

しかしながら、より重要なのは、貿易形態の變化であろう。一八四四年三月二十六日、閩浙總督劉韻珂は廈門附近の密輸に關して、以下のように上奏している。

該司（布政使）の調べたところによりますと、何厝郷、卓崎、深鵝などの場所はみな廈門港の外にあり、水陸に通じていて、以前内地の商船が商品を販賣に廈門に赴いたとき、各當該の場所はたまに結託して密輸を行うことがあります。そのうち何厝郷は人口・戸數が多く、民情も粗野で、卓崎などの所と比べてもっとも甚だしいです。夷人（外國人）が廈門に來て通商し始めてから、該郷の奸民は商賣になると考え、ただちにひそかに牙行（仲買商）を開設し、船隻を購入・建造して、夷船（外國船）と結託して廈門港外で荷下ろしをして密輸することをもくろみました。開港してまもなく、各夷船はみな（廈門に）直接入港し、該郷の奸民はいまだに各夷人と結託することができず、まだ密

輸もありません。⁽¹⁹⁾

劉韻珂の上奏とは異なり、実際には開港場周辺では「密輸」が横行していたが、貿易が開港場ないしその附近における「密輸」に集中したことは間違いない。これは一九世紀初頭以來、廈門などの主要港に代わって貿易量を増やし、アヘン戦争直前期にはアヘン貿易が盛んであった小港の機能を低下させた。とりわけ開港場から離れた位置にあり、歐米船の「密輸」にも参加できなくなった小港の打撃は大きかっただろう。それゆえ、従来のように貿易の利益を享受できなくなった沿海の住民が海賊化したものと考えられる。したがって、海賊の構成員は如上のようにアヘン貿易従事者と共通する漁民や船員であった。そして、海賊の艦隊がしばしば小規模な港灣に展開したのも、イギリス軍艦による搜索の眼を逃れるのと同時に、こうした小港こそが彼らの根據地であったからである。

第二章 海賊への對應——清朝とイギリス海軍

(一) 清朝の對應

當該期における海賊に對する清朝の對策であるが、清朝中央としてはアヘン貿易對策やアヘン戦争時のような沿海部全域に對する明確な對應はない。一方、各省においては水師による掃討や招撫に加え、一八五二年二月に閩浙總督李之昌が上奏しているように、保甲の編查⁽²¹⁾、團練の編成などの手段が講じられている。ただし、後二者はアヘン貿易對策やアヘン戦争での漢奸對策と同様の手段であり、その効果は疑問である。

それでは、當時、水師による海賊掃討は可能であったのか。まず、清朝水師の中でも最大の規模をもち、海賊掃討にあたるべき福建水師の開港時の状況をみてみたい。

アヘン戦争における廈門陥落（一八四一年八月二十六日）の後に汀漳龍道として漳州に赴任した張集馨は次のように述べ

ている。

漳州府城外に軍功廠（造船所）があり、毎月道臺を派遣して監督して戦船一隻を建造させ、海上をパトロールして（海賊などを）逮捕するのに用いるとしている。実際には、水師が戦船を受領すると、商賈が商品を販賣して米を運搬するのに賃貸したり、あるいは臺灣を往來する役人に賃貸し、たまたま海上に出ても、また海濱に碇を降ろしているのみであり、いまだかつて洋盜多數を逮捕したことはない。洋盜と水師は同じようなものであり、その父が洋盜であり、その子が水師であることはいつものことである。水師の兵丁は仕事をしくじって解雇されれば、たちまち洋盜となり、水師營で水師の兵丁を招募すれば、洋盜がただちにやって来て入隊する。まことに海岸線や潮の状況を熟知した者でなければ補充することはできないのである。⁽²⁴⁾

ここからは福建水師が商業に従事することを本業にして海賊を鎮壓せず、そもそも水師と海賊がほとんど同一であることが分かる。そのうえ、福建水師提督寶辰彪その人が海賊あがりであり、近頃はもうろくし、廈門陷落の際にはなりふり構わず同安に逃亡したという。⁽²⁵⁾

また、一八四一年十月、イギリス軍が浙江の定海・鎮海を陥落させた後に寧波の救援を命じられた閩浙總督顏伯燾が上奏したところによると、

福建全省の海港で一、二に重要なものは六、七十カ所以上で、いたるところ兵の防守が必要ですが、本省の兵員数は多くなく、陸路は分派するには足りません。そこで多くは郷勇を徵募して加勢とし、水路は哨船が盜賊を攻撃することが可能なのみで、夷船（イギリス艦）の砲火にはとうてい對抗できません。臣が建造した船舶四十餘隻は、逆夷（イギリス軍）が廈門に闖入した後に、ことごとく焼かれ、大小の各大砲も海中に投げ入れられ、いまや船や大砲がともになく、水師もまた（寧波に）赴くのは困難です。⁽²⁶⁾

とある。元來各港への配備には不足し、治安維持が中心で對外戦争には適さなかった福建水師が、イギリス軍の廈門占領

の際に大損害をうけたことが窺える。その後も水師の補充は進まず、一八五〇年に至っても、水師の船隻で實働可能なのは十一隻にすぎなかった。⁽²⁷⁾

當然、水師と海賊の力関係は逆轉した。一八四七年七月の駐廈門英領事の報告によれば、福建人海賊林坎はここ三年間に數回にわたって福建水師提督（資辰彪）に挑戰状を送り、提督座乗の船舶を自ら攻撃しており、⁽²⁸⁾水師の權威は地に墜ちていたといえよう。

また、廣東の海賊張十五は福建・浙江沿岸の略奪、破壊を差し控える代わりに欽差大臣徐廣縉に對して二十萬兩を要求した。⁽²⁹⁾張十五の海賊に對しては廈門の武官も住民も恐怖を抱いており、もし出現すればアヘン戦争時と同様に城内に避難するとみられていた。⁽³⁰⁾事實、張十五に限らず海賊が廈門周邊の村落はもちろん、廈門の城壁のすぐ外側で活動しており、海賊の危険は極めて身近であったが、⁽³¹⁾水師はそれすら抑制できなかった。

水師と海賊が戦鬪を交えた場合でも、水師が敗北する可能性が高かった。イギリス領事報告によれば、一八四九年に水師は海賊に浙江の漁山で敗北していた。⁽³²⁾また、一八五二年九月には閩安營に所屬する水師の哨船が竿塘附近で廣艇の⁽³³⁾船隊に敗北して大砲や銃を奪われている。⁽³⁴⁾したがって水師の實力による海賊掃討は困難であったといえよう。

そこで、招撫策が重要となり、海賊の水師への編入が試みられる。例えば、閩浙總督劉韻珂は降伏した福建籍の海賊を福建・浙江の水師に編入することを要請していたが、一八四七年一月七日の上諭では、弊害が多いことから水師編入は却下され、嘉慶十八年（一八二三）の事例にならない福建・浙江から離れた遠方の諸省の各營に編入することが命じられた。

しかし同年五月一日、閩浙總督劉韻珂は水師編入の有効性を説いて再び福建・浙江水師への編入を強く要請する上奏を行⁽³⁵⁾い、それが認められている。⁽³⁶⁾ここからは、海賊の歸順が現地における水師編入を前提としていたことがうかがえ、嘉慶海寇時と比較して清朝側の立場の弱體化を表しているといえる。そして、後述の廣艇の事例が示すように、清朝水師の實力がない以上、招撫策が海賊をコントロールして機能した可能性は低い。結局のところ、清朝水師を中心とした沿海の治安

回復は期待できなかったのである。

(二) イギリス海軍の登場

ここに登場するのがイギリス海軍である。すでにアヘン戦争中からイギリス海軍は海賊掃討を行っていたが、開港當初における海賊掃討活動は活発ではなく、一八四五年三月八日には、明確な根據なしにいかなる中國船に干渉することも禁止された。その原因は、海賊と商船・漁船の識別が困難なことにあった。⁽³⁸⁾ 海賊船は多くが商船を偽装しており、清朝水師も識別が困難であったとされるから、イギリス海軍は一層識別が困難であっただろう。⁽³⁹⁾

イギリス海軍がこうした不介入政策を轉換する契機となったのが、海賊の外國船貿易襲撃、とりわけアヘン貿易への攻撃であった。開港後、アヘン貿易は中國側の默認を受け、開港場の港外で行われるようになっており、廈門附近では、泉州灣、深滬灣、南澳などで取引が行われていた。⁽⁴⁰⁾ こうしたアヘン貿易に對する襲撃は沿海部でしばしば行われたが、これは開港後にアヘン貿易に参加できなくなった沿海民達が、外國船によるアヘン貿易を襲撃して、貿易の利潤奪回を企圖したとみなすことができるかもしれない。

一八四七年、そうしたアヘン貿易襲撃事件の中でも最悪の事件が発生する。二月七日、深滬灣においてアヘン貿易を行っていたイギリス商社所有のスクーナーのキャロライン (Caroline) とオメガ (Omega) が廣東人海賊 (澳門の漁船) の襲撃を受け、積み荷のアヘンが奪われ、船員三十人以上が殺害された。この事件の結果、廈門港附近にアヘン貿易が移動することになる。⁽⁴²⁾

この深滬灣事件に關與したとみられる澳門の漁船は兩廣總督から海賊捕獲を命じられた官僚の指揮下にあり、イギリス領事は廈門の武官は手出しができないとみなしていた。⁽⁴³⁾ そこでイギリス側は自國の軍艦を用いて廈門近郊における海賊掃討を開始した。

一八四七年三月十一、十五、十七日に、イギリス海軍のスループ型艦スカウト (Sloop) は海賊掃討を実施し、三隻の海賊船を拿捕し、八十九名を捕らえた。捕虜のうち八十六名は廈門のイギリス領事館においてイギリス領事と清朝地方官僚の審問を経たうえで清朝側に引き渡され、約八十名が斬首を宣告された。また、解放した船舶と積み荷の代金は報奨金としてイギリス艦艦長に支拂われている。この海賊掃討は廈門の商民の歓迎を受けており、駐廈門イギリス領事レイトン (T.H. Layton) は、

廈門の商人と市民は我々の海賊に對する戰鬪の開始を喜び、海上の交通路が彼らの商業的事業とその合法的な営みに開かれることを期待している。⁽⁴³⁾

と述べている。續いて同年六月、英艦スカウトは有力な福建人海賊林坎の逮捕にも成功しており、イギリス海軍艦艇が積極的な海賊掃討を展開し始めたことが分かる。

一八四八年になるとイギリス海軍省も中國沿岸における海賊の獎勵を認識して方針を轉換、領事や清朝側の官僚と協力して「海賊」掃討を進めることを推奨するようになり、海賊掃討に際しては、イギリスの大藏省から報奨金が支給された。⁽⁴⁶⁾⁽⁴⁷⁾ 駐廈門イギリス領事も交易の安全確保、イギリスの軍事力示威という目的から、これを積極的に支持した。以後、福建沿海における海賊掃討は續いていくことになる(表参照)。

こうしたイギリス海軍の活動に對し、海賊側もスパイを駐廈門イギリス領事館の苦力として送り込み、イギリス艦の移動情報を海賊に傳達させていた。⁽⁴⁹⁾ 海賊側にとってもイギリス海軍の脅威は高まりつつあったのである。

その中で、イギリス海軍が廣東から福建沿海で活動していた五十隻の艦隊をもつ廣東人海賊張十五の艦隊を福建海域から撃退し、さらに清朝地方官の協力を得つつ香港附近からトンキン灣にかけての海域で撃破したことは、清朝地方官にイギリス海軍の有用性を認識させ、⁽⁵⁰⁾⁽⁵¹⁾ 大きな効果をあげた。

廈門においても、清朝地方官僚とイギリス海軍の協力體制の構築が進展していた。一八四九年六月にはイギリス海軍ブ

表 福建海域におけるイギリス海軍の海賊掃討活動

年 月	イギリス軍艦名	捕虜数	解放者数	海賊船隻数	破壊船隻数	拿捕船隻数	場所、海賊の所屬等	出 典
1847年3月	Scout	86				3	南日島附近など	FO228/70,FO663/52
1847年7月	Scout	82	15				泉州府	FO228/70,FO663/52
1847年8月	Scout	22	7	7				FO228/70,FO663/52
1847年12月	Scout	85	13	6				FO228/70,FO663/52
1848年6月	Scout	62	4	2		2		FO228/84
1849年5月	Pilot	8		1				FO228/98
1849年5月	Pilot	76	45				湄州沖、臺灣沿岸	FO228/98
1849年6月	Pilot	83		4		3	臺灣沿岸	FO228/98
1849年6月	Pilot	47		2				FO228/98
1849年10月	Medea						南澳附近、廣東海賊	FO228/98
1849年10月	Fury, Columbine						張十五の船隊	FO228/98
1852年2月	Lily							FO228/141
1853年11月	Hermes	7			22	3	湄州附近	FO228/155
							福建・廣東海賊	
1853年12月	Hermes					40	小刀會	CM
1853年12月	Hermes	23				16	虎頭山、廣東海賊	FO228/155
1854年6月	Bittern				1		福建海賊、小刀會殘黨	FO228/171
1855年1月	Bittern			9	2		主に廣東海賊	FO228/188
1855年6月	Racehorse	58		15	2	2	廣艇	FO228/188
1856年8～9月	Comus				7	1	湄州附近	FO228/211,ADM125/1

1857年1月	Sampson	14					惠安縣崇武沖、香港ジャンク	FO228/233,FO663/64
1857年4月	Camilla			4	1		圍頭澳	FO228/233
1857年4月	Camilla	28	3		1	1	書尙、廣艇	FO228/233,FO663/64
1857年4月	Sampson, Camilla	24			15	5	湄州など、廣艇など	ADM125/1
1858年4月	Elk							FO228/251
1858年9月	Magicienne, Algerine						イギリス船員殺傷に対する圍頭 への報復攻撃	FO228/251
1858年9月	Banterer			8	9		興化灣	ADM125/3
1858年9～10月	Magicienne, Algerine		53	22	18	2	湄州	ADM125/3
1858年10月	Banterer		1		1	3	南關島附近	ADM125/3
1859年5月	Kestrel, James						小金門島附近搜索	FO228/265
1859年12月	Bustard	2	3		6		定海灣・黃岐灣	ADM125/4
1860年3月	Scorn	1					湄州附近、海賊行爲を行う村落 を攻撃	ADM125/5
1860年7月	Gunboat No. 73						湄州附近	FO228/285

リグスループ型艦パイロット (Pilot) の活動に感謝した清朝側官僚は一層の協力と海賊の名前と出没地域などの情報提供の意志があることを示し、また清朝の戦闘ジャンクとの信號交換も成立した⁽⁸²⁾。また、領事の名前 (Layton) を合い言葉として舷門に掲げることにより、イギリス船と清朝水師が相互の識別を圖った⁽⁸³⁾。

一方、イギリス海軍と廈門の中國人商人との協力體制の構築も進展した。イギリス商船からの情報提供は當初より存在したが、中國商船からの情報提供による海賊掃討も進んだ。一八四九年六月、臺灣西岸で海賊掃討を行っていた英艦パイ

ロットは商業ジャンクからの情報を受けて掃討を進め、一八五一年にはイギリス領事が中國人商人から金門附近で海賊によつてジャンクが拿捕された情報を入手してスループ型艦リリー（*Li-li*）に出動を要請し、リリーには拿捕されたジャンクの船主が搭乗して掃討が行われた。⁽⁵⁵⁾

このようなイギリス海軍の海賊掃討の進展は、廈門などの開港場の交易にも影響を与えた。一八四九年には英艦パイロットが臺灣の港口から福建人海賊を驅逐したことにより、寧波や上海に米穀が移出されたにも関わらず廈門の米價は下落しており、廈門・臺灣間の米貿易の安全も確保されつつあった。そして、廈門の交易を阻害していた海賊の排除は、廈門の商人達にとつて利益になり、しばしば商人達がイギリス側に感謝を示すようになる。⁽⁵⁷⁾

以上から、地方の文官や水師の武官などの廈門の官僚・商人とイギリス海軍が結びついて、福建・廣東人海賊に對抗するという圖式が成立していたことが分かる。海賊と官僚・商人の對立の圖式は、一七世紀末以來の傾向であり、官僚・商人側にイギリス海軍が加わったのである。かかる地域的協力關係が生まれていった背景には、アヘン戦争の衝擊が廈門の官僚・商人にイギリス海軍の實力を認識させていたことがあるかもしれない。

こうした圖式の下でのイギリス海軍による廈門を基地とした海賊掃討作戦の進展は、福建沿海の海賊勢力には大打撃となり、とりわけ海賊の集團形成に大きな影響を与えた。當時の海賊の正確な人数は不明であるが、駐廈門イギリス領事は一八四七年十二月に廈門・福州間に二千人、一八四九年六月にも廈門・臺灣西岸・閩江河口の間に三千人の海賊がいると報告を行つており、福建沿海では千人單位にすぎなかったことが分かる。⁽⁵⁸⁾

掃討の對象となつた海賊も表に示すように比較的小規模である。大規模な事例を取り上げてみても、一八五三年十一月に湄州附近で確認された海賊は、廣東ジャンク十五隻と福建ジャンク二十五ないし三十隻から構成されていたとされ、また一八五四年六月には福州附近で五十隻の福建海賊ジャンクによる襲撃が行われている。⁽⁶⁰⁾したがって、個々の集團は最大でも五十隻程度とみられる。以上から、當該期の海賊の規模は、廣東の海賊連合だけでも一千隻以上、數萬人に達した嘉

慶海寇などと比較すれば小規模であったといえよう。⁽⁶¹⁾ 従來の海賊も海賊の小集團が連合する形をとって大集團を形成していたが、イギリス海軍の活動は、こうした小集團の形成すら困難にしたため、大規模な集團に發展する可能性が失われたのである。さらに海賊は交易の中心となりつつあった開港場からも排除されており、交易の利潤を確保して清朝に對抗する集團の發生は不可能になった。それどころか、場合によっては弱體化した清朝水師によって掃討される可能もでてきた。實際に一八五〇年代前半における水師の掃討は小規模な海賊船團を對象とする事例が多い。

結局、イギリス海軍は廈門を據點として一八四〇年代末までに福建沿海部で大規模な海賊掃討に成功し、海賊集團は抑え込まれた。それでは、上記のようなイギリス海軍の活動の中で、一八五〇年代に福建人海賊と廣東人海賊はどのように對應したのだろうか。

第三章 福建人海賊の衰退と廣東人海賊の臺頭

(一) 閩粵沿海民の反亂と福建人海賊の退場

一八五〇年代前半、沿海部では一八五三年五月に勃發した廈門小刀會を皮切りに、上海、廣東などで福建・廣東沿海民の反亂が多發する。これらの反亂には沿海の海賊が關與し、いずれも開港場周邊で發生していることから、貿易から排除された沿海の勢力が、貿易の集中する開港場奪取を圖つたとみてもよいかもしれない。ここではそうした反亂の中から廈門小刀會を取り上げ、福建・廣東人海賊の動向をみていきたい。

廈門小刀會は東南アジアから歸國した華僑が中心となった反亂であり、小刀會勢力が奪取した廈門を中心に展開する。⁽⁶³⁾ この反亂ではシンガポールから人員・物資の補給が行われたうえ、海賊も小刀會を支援していたとされ、⁽⁶⁴⁾ 福建人海賊を中心とした海上勢力に依存した面が大きいと考えられる。

清朝側は東南アジアから補給を行う小刀會勢力を海上封鎖する必要があったが、小刀會はイギリス側と良好な関係を維持し、イギリス海軍は内政不干渉の立場から中立を保つたため、イギリス海軍を利用することができなかった。そこで清軍水師は廣東人海賊を雇用した。駐廈門イギリス領事バックハウス(J. Backhouse)は次のように記している。

帝國の船隊(清朝水師)の中で最も有効な部分はこの軍務(小刀會鎮壓)のために雇われた、海賊にほかならないと思われる廣東(艇)または通稱「廣艇」によって構成されている。これらはよく武裝されて人員も配置されているが、ひろく伝えられまた信じられていることには、大多數は叛徒(小刀會)と結託しており、彼らの戦闘の効果はこうした考えを支持させる傾向にある。⁽⁶⁵⁾

ここからは、廣東人海賊である「廣艇」が雇用され、清軍水師でもっとも有力でありながら、小刀會と結託している可能性が指摘されている。

これらの廣艇は本來對太平天國戰に使用する豫定のものであったが、廈門小刀會鎮壓に轉用されていた。閩浙總督王懿德は廣東の紅單船について、

思うに前項の船(紅單船)は、以前六、七月の兩月に福建を通過し、上諭に従いまして水師と協力して賊匪(小刀會)を攻撃しています。該艇は船も大砲も頑丈で、弁兵も勇敢であり、前任の⁽⁶⁶⁾(浙江)提督の李廷鈺が自ら率いてきた部隊とともに、水陸の犄角の勢いとなり、いずれも逆匪の恐れるところとなっています。今、江南の軍務は緊急かつ重要で、雇った艇船はもともと粵逆(太平天國)を討伐するためのものであり、もちろん命じて應援に急派させるべきです。ただ、廈門の逆匪討伐はちょうどうまくいっており、逆匪の中堅を撃破し、要害を占據し、すでに(敵は)重圍に陥り、この(水陸)兩路から挟み撃ちにすれば、頭目を捕らえることも期待できます。もし急に艇船を撤退させれば、逆匪の勢いがまた擴大し、兵の心が次第に不眞面目になり、全體の局面に大いに影響するでしょう。……

と述べ、紅單艇の廈門駐留期間の延長を求め、結果として廈門奪回まで使用した。⁽⁶⁸⁾ 結局の所、清朝側はもともと向背すら

定かでなかった紅單艇＝廣艇すなわち廣東人海賊に依存しなければ小刀會勢力に對する海上封鎖を實行できなかったのである。

その後、清軍による海陸からの廈門包圍が進み、一八五三年十一月十一日、小刀會の艦隊は廈門を脱出、廈門は清軍の手に落ちた。⁽⁶⁹⁾この小刀會の敗北は福建人海賊に對する廣東人海賊の勝利とみなしてよいだろう。以後、小刀會勢力は廈門を離れて上海、臺灣、東南アジア方面に展開していくことになる。

廈門を離れて根據地を失った小刀會勢力は沿海で略奪活動を行わざるを得なかったため、從來中立の立場をとっていたイギリス海軍による海賊掃討の對象となった。同年十一月のスループ型艦ハーミス(Hermes)の海賊掃討活動で捕獲された三隻のジャンクのうち二隻は廈門を脱出した小刀會艦隊に屬していたものであり、⁽⁷⁰⁾脱出直後にイギリス海軍の掃討を受けたことが分かる。さらに翌月に英艦ハーミスは海賊のジャンク四十隻を破壊ないし捕獲したが、それも廈門を脱出した小刀會の艦隊とみられていた。⁽⁷¹⁾また、翌一八五四年にイギリス人所有のローチャ船を襲撃してブリグ型艦ビターン(Bitum)の掃討を受けた船舶も小刀會の艦隊と關連があるとされている。⁽⁷²⁾

こうしたイギリス海軍の福建沿海での活動の結果、小刀會の殘存勢力を率いる黃位は福建沿海で活動することが不可能になり、事態は一層清朝側に有利になった。黃位の勢力は以後、臺灣海域での活動を行い、鷓鴣籠(後の基隆)を襲撃して船舶を奪取していくことになる。⁽⁷³⁾その後、黃位は廈門再占領を狙っているが、駐廈門イギリス領事パークス(Parks)が廈門の安全はイギリス軍艦の存在に依存していると述べているように、⁽⁷⁴⁾イギリス軍艦の存在が黃位の根據地奪回の障害になった。結局一八五四年十一月に黃位は澎湖島を撤退し、海南・コーチシナへ移動したとみなされている。⁽⁷⁵⁾

以上のように、開港後にイギリス海軍の海賊掃討がすすんだうえ、小刀會の亂において清朝と廣東人海賊の連合勢力に敗北し、さらに後述するような廣東人勢力擴大のなかで、福建人海賊は弱體化し、開港場附近から排除されていく。そしてその後、黃位のように清朝地方權力に挑戦する大規模な福建人海賊が登場することはなかった。ここに宋代以來中國沿

海部で主要な役割を果たしてきた福建人の影響力は大幅に低下することになる。

以後、沿海の福建人は東南アジア方面への展開を進めるとともに、福建人商人は福建人海賊ではなく外國船の利用などによって商業活動の安全を確保していく。⁽⁷⁶⁾

(二) 廣東人海賊の臺頭

福建人海賊の退潮とは對照的に、勢力を擴大してきたのが廣東人海賊である。ここでは、廣東人海賊が如何にして勢力を擴大してきたのかを検討したい。

開港後に廣東人海賊が勢力を擴大した背景には、歐米人との關係がある。開港前から歐米人と接觸していた廣東人は、その優れた技術を導入し、また、軍需物資の供給を受けていた。例えば、前述した廣東人海賊張十五の座乗する船舶は廣州で鐵裝されてイギリス船に類似した方式で銅板を張っていたという。⁽⁷⁷⁾ また、一八五八年九月に湄州で捕獲された廣艇などの船舶が裝備していた一二ポンドないし一八ポンド砲はイギリス製であった。⁽⁷⁸⁾ こうした裝備の面で廣東人海賊が他集團よりも優位にたったことは間違いない。

歐米人は廣東人に技術や物資を提供するだけでなく、廣東人海賊船に搭乗する場合もあった。一八六〇年七月に湄州附近で掃討された海賊船にもイギリス人とドイツ人が乗り組んでいたとされ、⁽⁷⁹⁾ 歐米人の海賊船搭乗の事例は多い。

また、ポルトガル船が廣艇と共同で海賊活動を行う場合もあり、⁽⁸⁰⁾ 一八五七年にイギリス海軍フリゲート艦サンプソン(Sampson)は湄州附近で廣艇とともに海賊活動を行っていたポルトガル國旗を掲げたローチャ船を捕獲したが、これはポルトガル船籍であった。⁽⁸¹⁾

さらに、廣東人海賊が歐米船隻を偽装する場合もあった。イギリス國旗の利用はしばしば指摘されているが、一八五四年に、福建省福寧府の三都澳でイギリスのローチャ船を襲撃した六隻の廣艇の内、一隻は福州においてアメリカ國旗を掲

げていたとされる。⁽⁸³⁾ こうした船籍偽装により、ある程度イギリス海軍の掃討を回避することが可能であっただろう。

外國人との關係は、廣東人海賊にとつての安全な根據地確保につながった。閩浙總督裕瑞は一八五一年十二月二日の上奏で海賊の根據地について以下のように述べている。

……あわせて聞くところに據りますと、當該の盜匪らが盜品を賣買するのに集まるのは、いずれも廣東香山縣の澳門、香港および浙江の石浦、溫州などのところです。その船内では多くが密輸品を所持し、偽つて商船として各處の港に赴いて販賣しないとは保證できません。⁽⁸⁴⁾

このうち、澳門と香港は廣東人海賊の根據地として廣く知られており、先述の歐米人と廣東人の接觸の多くも、この兩地で行われていた。同時に注目されるのが石浦や溫州であり、これらは寧波と福州という開港場の間に位置し、開港場を基地とするイギリス海軍の掃討が及びにくかった地域とみてよい。⁽⁸⁵⁾ 同様に、裕瑞が自らの責任回避の爲に意圖的にあげていないと思われる福州―廈門間にある湄州島周邊も重要な根據地であつた（表參照）。そして、これらの地域における海賊活動の活性化は、海賊の根據地としての閩南の地位の低下を示している。

以上のような要因に加えて、廣東人海賊の勢力擴大の重要な要因は清朝官僚との關係の利用である。先述したように、深滬灣の海賊と廣東人水師指揮官との關係については事件當初からイギリス領事レイトンは疑つていた。そして一八四九年十月にレイトンは、兩廣總督から海賊討伐を命じられ、福建水師提督から海賊討伐を委任されていた黃富興は深滬灣事件の海賊行爲に荷擔した可能性が高く、イギリス側が拘束したが、廈門當局は處罰できない可能性が高いとし、廣東人海賊と官僚の癒着を指摘している。⁽⁸⁶⁾

こうした廣東人海賊と官僚の癒着の背景には、當該期において福建水師提督をはじめとする福建水師の武官の多くが廣東人であつたことがあると思われる。先述した海賊出身の寶辰彪は一八四一年から約九年間福建水師提督をつとめたが、彼も廣東人であり、一八五〇年にそのあとを繼いだ鄭高祥も潮州人であつた。⁽⁸⁸⁾ 彼らが廣東人海賊と關係をもつていた可能

性は高く、一八五八年八月にもイギリス領事は、福建水師提督は廣東人で廣艇の艦隊指揮官と關係があると指摘している。⁽⁸⁹⁾ 逆に言えば、福建水師への廣東人進出と福建沿海における廣東人海賊の擴大は連動していた可能性が高い。

これらの廣東人海賊は先述したような廈門小刀會や太平天國などの反亂鎮壓に活躍した。さらに、海賊対策として一八五〇年代初頭までは各地で廣艇の雇用が行われており、福建においても福建水師の能力低下から小刀會鎮壓後も臺灣海峡における海賊（小刀會殘存勢力）鎮壓に廣艇を雇用することになった。⁽⁹¹⁾ これは一種の「招撫」とみてよいだろう。

かかる廣艇の活動は廣東人商人と無關係ではなかった。當初イギリス領事パークスは廈門で雇用された廣艇は在廈門イギリス商社の通譯ないし買辦を通じて廣州で雇用されて派遣されたとみなしていたが、⁽⁹²⁾ イギリス領事館の通譯官ウィンチエスター（C.A. Winchester）は以下のような背景を述べている。

よく知られていることには、道臺（興泉永道）によつて雇用された廣艇はAwoonによつて地方政府に貸し出された。⁽⁹³⁾ Awoonは自らの重要な商業を營んでゐるのに加え、サイム商會（Messers F.D. Syme & Co.）公認の兩替商でもあった。⁽⁹⁴⁾ ここから、買辦であるAwoonを通じて廣艇が雇用されていることが分かり、開港後に廣東人が沿海地域に買辦として勢力を擴大したことが、廣東人海賊の擴大をもたらししていることを示す。このように雇用された廣艇は公的任務につくことで貿易ルートを擴大することが目的であつたとされており、⁽⁹⁴⁾ 廣東人商人と利害が一致していた可能性が高い。彼ら商人を通じて廣東人海賊は開港場にまで進出することが可能になったのである。これは開港場で活動する福建人商人と對立し續けた福建人海賊との大きな違いであり、開港後に沿海部の開港場において廣東人が福建人に對して優位に立つた一因とも考えられる。

以上のような外國人や清朝地方官僚との關係を利用しつつ、安全な根據地を確保した廣東人海賊は、開港場をも基盤としつつ、沿海部全域にわたる廣範な地域での活動を行うようになった。⁽⁹⁵⁾ とりわけ、廣東人海賊の福建海域への全面的進出は、アヘン戦争以前では想定しがたい事態であつた。そして福建に進出した廣東人海賊は現地の福建人海賊と同盟を結び、⁽⁹⁶⁾

さらには商船の護衛などを請け負い、それによって勢力を擴大していった。

それでは、こうした廣東人海賊の擴大はどのような事態を引き起こしたのだろうか。

(二) 廣東人海賊の問題

廣東人海賊を雇用したものの、當時、廈門の當局に財政的餘裕はなかった。一八五三年十一月、清朝は小刀會の反亂鎮壓に成功したが、小刀會鎮壓に協力した廣艇の艦隊指揮官は、給與が支拂われなければ太平天國討伐に向けて移動せずに廣州に戻ることを主張しており、窮した廈門の地方官僚はイギリス領事に資金援助を要請するに至った。

また、先述した雇用された廣艇も問題を引き起こしていた。一八五四年十二月にイギリス領事パークスは次のように述べている。

小刀會の黃位だけが、廈門現地商人が不平を言う匪賊ではなかった。彼ら（廈門現地商人ら）の山東ジャンク（山東省向けジャンク）が最近、この海域で海賊行爲を行っている廣艇の手に落ちたものの、すぐに水師と政府に雇われた廣艇の混成部隊に救出されたが、彼らは以前前者（廣艇）が要求したのと同じぐらい重い救助の代償を後者（水師・廣艇）に要求された。現在二隻の戦闘ジャンクがこの港（廈門）の水師の常備に相當するが、一隻は航海に耐えず、もう一隻も恐らくほとんど役に立たない。

ここから海賊の廣艇と雇用された廣艇がほとんど同額の金額を商人達に要求していることが分かる。そして、水師も海賊と同様の行爲を行っていたうえ、ほとんど戦力がなかった。

一八五五年一月、英艦ハーミスによって捕獲された廣艇が賣却された後、廈門道臺が雇用した廣艇關係者に拿捕されて金門に回航される事件が発生した。通譯官ウインチェスターの廣艇返還の要請に對し、道臺は廣艇を解雇したので影響力を及ぼすことができないとし、福建水師提督は麾下の優れたジャンクが廈門にいないので、船舶の奪回にはイギリス側の

協力が必要とした。結局イギリス領事はポルトガル領事を介して Awood に壓力をかけることで船舶を返還させている。⁽¹⁰⁰⁾ここからは、廣艇を解雇した結果、實力のない清朝側は廣艇への影響力を失い、對處もできなくなったことがうかがえる。そして同年二月十三日にウィンチェスターは以前道臺に雇用されていた廣艇が八日前に廈門を出港し、數日後にそれぞれ二隻の臺灣・泉州ジャンクを拿捕したとつたえられたとしている。⁽¹⁰¹⁾つまり廣艇は解雇と同時に海賊業に復歸したのである。

このような廣艇の活動は、開港場周邊の交易の障害となった。一八五五年六月二十七日、イギリス領事バックハウスは次のように述べる。

……多くが廣艇から成る尋常でない數の海賊船が、現在、この省の沿岸に横行している。當地（廈門）と臺灣の間の貿易を行う現地の船舶は（海賊に）拿捕される大きなリスクを負い、また一方で當地と福州および福州以北の地との交通も、現地船舶に關するかぎり完全に停止している。⁽¹⁰²⁾

ここに、一八五〇年代中葉、廣艇の活動は最盛期を迎えつつあった。自らこれに對應できない清朝は別の手段を講じる必要があった。

第四章 イギリス海軍と地域秩序の回復

（一）清朝地方官とイギリスの地域的提携

咸豐帝の即位（一八五〇年三月）以降、清朝中央とイギリスの關係は再び悪化していた。そうした中でイギリス海軍との協調は總督・巡撫レベルでは進展しなかった。福建省ではイギリス領事パークスが、駐中國公使兼香港總督およびイギリス海軍指揮官には海賊鎮壓への援助と協力の意志があるということを閩浙總督に伝えるように廈門道臺に對して正式に打

診した。これに對し、道臺はイギリス海軍の援助を望んでいたが、總督への傳達を躊躇していているとみられており、省當局の否定的反應をうかがわせる。⁽¹⁰⁸⁾

一八五六年八月七日の閩浙總督王懿德の上奏でも、

イギリスの（駐中國公使兼香港總督）バウリング（Sir J. Bowring）の照會文によりますと、「海盜は五港が通商するなかで海上を往來し、ほしいままに掠奪を行い、軍艦を派遣して徹底的に掃討したが、なおいまだ十分に完全な效果を収めたとはいえない。現在、毎年冬と春の兩季に、江蘇省の吳淞から軍艦一隻を南に派遣し、海岸沿いに寧波、福州、廈門、香港、黃埔の各處を経させ、夏秋の兩季には廣東省の黃埔から海岸沿いに香港、廈門、福州、寧波、吳淞の各口を経させる。當該の軍艦に命じて、およそ盜匪で潛んでいて、商船を害するものがあれば厳しく討伐し殲滅し、よって肅清を期する。」という件が參りました。わたくし王懿德は、福建・廣東兩省の水師をもつて各海上を管轄し、（福建・廣東の海が）廣々として長く續き、盜匪が機會に乗じて欲しいままに略奪をはたらいているものの、すでに當該の管理の責任のある鎮將に、おのおの水師を率い、常に哨戒し、力をあわせて掃討することを命じました。閩浙の水陸路の各文武官によれば、前後して洋上で各件の洋盜多數を攻撃して捕らえたということであり、該夷と助け合つて掃討、逮捕するには及びません。……⁽¹⁰⁹⁾

とあり、清朝水師が無力であることを報告せず、あくまでも清朝水師單獨による掃討を主張し、イギリス海軍との協力を公式には認めることができなかったことが分かる。

しかしながら廈門においては、先述したように、清朝地方官僚と商人およびイギリス領事・イギリス海軍が結びついて海賊勢力に對抗する圖式が成立しており、一八五〇年代は、この圖式が強化されていく。とりわけ廣艇に對應できない清朝地方官僚達が、むしろ積極的にイギリス領事・イギリス海軍の要請に應じていくことになる。

一八五五年六月にはイギリス領事と福建水師提督李廷钰は海賊討伐のためにイギリス艦と水師のジャンクによる合同の

艦隊を派遣することに合意した。これは海賊の出沒によってイギリス艦が急派されたことにより實現しなかったものの、⁽¹⁶⁾ 畫期的な動きであった。

また、從來から海賊と漁船・商船の識別は困難な問題であったが、⁽¹⁰⁶⁾ 一八五六年二月に福建水師は英艦ビターン艦長の要請に應じて海賊識別のための官僚の派遣に同意した。⁽¹⁰⁷⁾

一八五七年三月三十日、廈門道臺は臺灣からの米輸送ジャンク船團を廈門近郊で廣艇が拿捕したという情報を伝え、イギリス軍艦の出動を要請した。イギリス領事はこれに應じ、スループ型艦カミール（*Canilla*）が⁽¹⁰⁸⁾ 出動して海賊の搜索・掃討にあたった。ここから中國商人↓清朝地方官僚↓イギリス領事↓イギリス軍艦という情報傳達回路が成立していたことがうかがえる。

こうしたイギリス海軍と清朝地方官僚の實質的な協力體制構築は、廣艇にも打撃を與え、同時期の廣東沿海におけるイギリス海軍と清朝の協力による海賊掃討や、江浙商人が購入した汽船による廣艇鎮壓活動とあいまって、⁽¹⁰⁹⁾ 廣東人海賊の擴大を阻止したと考えられる。一八五〇年代後半における廣東人海賊の活動減少はそれを示しているのだろう。

その後、一八五九年に廣艇の雇用は再び行われているが、⁽¹¹⁾ 翌年には福州での福建人との騷擾を契機として廣艇が福州附近からも排除された。⁽¹¹²⁾ 排除された廣艇が同年七月には温州附近で活動していることから、廣艇は福建海域から排除されつつあったとみなしてよいだろう。そして一八六〇年十一月十九日、廣艇の船隊十八隻、人員二―三千人が福州に侵入を試みて撃破され、大きな損害を出した。⁽¹¹⁴⁾ ここに福建沿海における廣東人海賊の全盛期は終わったのである。

（二） 地域秩序の確立

イギリス海軍の活動は地域の秩序に大きな影響を與えた。とりわけ、廈門に軍艦が停泊していることは、決定的に重要であった。イギリス軍艦の廈門停泊の必要性については、一八五一年に廈門に海賊が接近した際に、イギリス領事が福州

から廈門への軍艦回航を主張したように、開港場への軍艦配備数が少ないこともあまって、強く意識されていた。⁽¹¹⁵⁾一八五三年にもイギリス領事ロバートソン (D.B. Robertson) は、イギリス軍艦は一日たりとも廈門を不在にしないほうがいいと主張している。⁽¹¹⁷⁾

一方清朝地方官僚の側でも、一八五四年に小刀會が鎮壓された後、廈門道臺は自らの管轄内で反亂が起った際にはイギリス軍艦の援助に期待していた。⁽¹¹⁸⁾また、一八六〇年に廈門道臺はイギリス領事に對して、海賊の艦隊が廈門を攻撃するという威嚇によって相當な恐慌が引き起こされているが、彼は港内のイギリス海軍のブリグ型艦と多くの外國船が廈門の安全を十分保證していると考えていると述べている。⁽¹¹⁹⁾

ここから、廈門にイギリス軍艦が停泊していることが海賊などから廈門を防衛するために必要であることが、イギリス領事、清朝地方官僚雙方から認識されていたことが分かる。實際、イギリス軍艦の存在する廈門を海賊が海上から攻略することは不可能であり、そうした試みすら行われていない。

この結果、廈門という開港場の安全が確保され、開港場における外國船貿易に海賊が影響を與えることはなくなった。先述したようにアヘン貿易船も開港場附近に移動したこともあり、外國船交易の開港場への集中は確立した。ここに、一九世紀初頭以來の閩南における貿易の分散化は終わりを告げたのである。

とはいえ、廈門周邊地域において中國ジャンクを襲撃する海賊が消滅したわけではない。イギリス海軍は公海での海賊掃討活動は行ったが、原則的には領海内での活動はできなかったため、領海内での治安は清朝が維持しなければならなかった。⁽¹²⁰⁾

しかし、一八五〇年代前半、清朝の廈門周邊における軍事力は近隣の海賊鎮壓にすら不足していた。一八五四年、同安縣沿海の村民が廈門と周邊のジャンク交易に對して海賊行爲を行い、廈門と漳州・泉州の交通を阻害しているため、イギリス領事パークスは村落を鎮壓することを福建水師提督李廷钰に要請した。⁽¹²¹⁾これは、パークスが、開港場である廈門と後

背地の間の交通の安全確保を重視していたことを示す。

これに對して李廷鈺は以前は鎮壓に失敗したが、再度陸海の部隊に鎮壓命令を出したとパークスに返答している。⁽¹²⁷⁾ しかしパークスは、水師提督は同安の反亂に荷擔した村落は鎮壓したが、海賊の村落についてイギリス領事は軍事力の不足（船上で勤務可能なのは數百人）から効果がないとみなしていた。⁽¹²⁸⁾ ここからうかがえるのは地方の軍事力の不足とともに、⁽¹²⁹⁾ 地方官僚達が反亂勢力以外に對しては寛容なことである。

そして一八五九年二月のイギリス領事報告でも廈門港の近くで海賊行爲が行われ、廈門周圍の村落や廈門市内でも代金のために拉致が行われていたとされる。⁽¹³⁰⁾ 同年の閩浙總督慶端の上奏でも、馬巷廳柏頭郷の住民が海賊を繰り返し、柏頭郷に水師が逮捕にむかった隙を見て廈門の内港で略奪を行ったとされた。これに對して水師が廈門に集結して柏頭郷の鎮壓を計畫しているが、水師提標中軍參將薛師儀が鎮壓に積極的でないとされて處罰が要請されており、⁽¹³¹⁾ 地方の武官達が鎮壓に不熱心であったことがうかがえる。ただし、一八五九年十月には薛師儀も參加して柏頭郷の掃討は行われたとされており、⁽¹³²⁾ 地域的な海賊活動の擴大は阻止しつつあったといえるかもしれない。

それでは、なぜ清朝地方官僚は廈門周圍の海賊を根絶しようとしなかったのだろうか。それは開港場の貿易が安定してそこに貿易が集中し、反亂勢力を鎮壓して廣艇の活動を抑制した現在、廈門の清朝地方官僚にとって小規模な海賊活動は大きな問題ではなかったからだろう。結局のところ一八五〇年代末には福建南部において、貿易の廈門への集中と大規模な海賊集團の消滅により、一七世紀末に確立されたのとある意味同様な沿海の秩序をほぼ回復することができたのである。地方の官僚達にとって、それ以上の地域への介入は不必要であった。⁽¹³³⁾ そして、多少の時間差はあるものの、こうした秩序回復は一八六〇年代以降、他の開港場でも達成されたとみてよい。

おわりに

本稿の内容を要約すると、次のようになる。開港後における貿易の開港場への集中は、沿海部でアヘン貿易などに従事していた人々に打撃を與え、海賊の増大を招いた。海賊活動の活発化は、イギリスの不介入政策を轉換させ、イギリス海軍は開港場を起點として海賊の掃討を開始した。その結果、大規模な海賊の編成は不可能になり、一八四〇年代末までに海賊集團は抑え込まれた。

イギリス海軍の出現のなかで、福建人海賊は、イギリス海軍による海賊掃討、廣東人勢力の擴大、小刀會などの反亂における敗北によりその宋代以來の中國沿海における影響力を失った。一方、廣東人海賊は歐米人との關係、安全な根據地の活用、清朝水師への參入、廣東人商人の利用により勢力を沿海部全域に擴大し、一八五〇年代中頃にその勢力は最大となった。

これに對し、イギリス海軍は廈門のように地方官僚との協力關係の成立していた開港場を據點として廣東人海賊を抑え込み、開港場間の歐米船の貿易の安全を確保し、分散化していた貿易の開港場への集中を導いた。そしてこれは他の開港場にも擴大していくことになる。結果として清朝はイギリス海軍の力を利用することによって福建人海賊を掃討し、のちには廣東人海賊をも抑制して沿海秩序の再編を成し遂げた。清朝は、いわばイギリス海軍を「招撫」することによって中國人海賊を招撫するよりも軽い財政負擔で確實に沿海秩序を回復したといえる。

アロー戦争の結果、天津・北京條約によって、清朝は海賊掃討において正式にイギリスとの協調關係を構築することになるが、これは開港後に各地で行われてきた地域的な清朝とイギリスの協調の追認及び全開港場への擴大といえるだろう。⁽¹²⁹⁾ として一八六〇年代、海賊掃討の進展によって一八世紀末からの華南沿海一帯における海賊の時代は終焉を迎える。⁽¹³⁰⁾ 開港場に貿易が集中し、外國人稅務司制度が開港場に廣がるのとあいまって、中國沿海は開港場を中心とした新たな時代に

入ったのである。さらに一八六八年以降には、イギリスが中國における軍事力行使を抑制していく一方で、同年、中國最初の汽走砲艦が江南製造局で建造され、中國近代海軍が勃興した。⁽¹²⁾ 結果として清朝は、自らの下で沿海秩序再編を完成した。こうして形成された秩序は、近代海軍の技術的優位と海關システムの整備によってある意味で清初よりも強固であったといえよう。

それでは、この過程で排除された沿海の人々はどうのように對應したのだろうか。海賊の問題と深く關連しながら今回扱わなかった海難の問題を含め、今後の検討課題としたい。

註

- (1) Grace Fox, *British Admirals and Chinese Pirates 1832-1869*, London: Kegan, Paul, Trench, Trubner & Co., LTD, 1940.
- (2) John K. Fairbank, *Trade and Diplomacy on the China Coast: The Opening of the Treaty Ports, 1842-1854*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1953.
- (3) 松浦章は列強の掃討による大規模な海賊から小規模な海賊という變化を指摘する。松浦章『中國の海賊』(東方書店、一九九五年)一五八頁。また、一九世紀東アジアにおけるイギリス海軍の役割を扱った下記の文獻でも海賊問題に觸れている。横井勝彦『アジアの海の大英帝國——一九世紀海洋支配の構圖』(同文館出版、一九八八年)二〇八～二〇九頁。
- (4) 本稿で取り上げる福建人は主として閩南人のことを指す。廣東人は珠江デルタの廣東人(廣府人)と潮州人の兩方を含む。この兩者は本來區別すべきであるが、史料上區別できないことが多いため、便宜的にこの呼稱を用いる。
- (5) 本書で使用する外交文書、海軍省文書は以下の通りである。Great Britain Foreign Office (以下 FO と略稱), Embassy and Consular Archives. China: Correspondence Series I (以下 FO228 と略稱); FO, Embassy and Consular Archives. China: Amoy (以下 FO663 と略稱); Great Britain Admiralty, China Station, (以下 ADM125 と略稱)。なお、本稿における女王が版權を有する未公刊文書からの引用はイギリス國立公文書館の規定に従い the Controller of Her Majesty's Stationary Office からの許可を得ていることを明記する。
- (6) 岡本隆司『近代中國と海關』(名古屋大學出版會、一九九九年)六〇～七五頁。
- (7) 當該期の海賊活動については、松浦章前掲書、一〇五～

一一〇頁參照。

- (8) 嘉慶海寇については、ベトナムから廣東海域については Dian H. Murray, *Pirates of the South China Coast 1750-1810*, Stanford: Stanford University Press, 1987. を、福建海域については勝田弘子「清代海寇の亂」『史論（東京女子大學）』一九、一九六八年を參照。海賊の社會史的分析には下記文献がある。Robert J. Antony, *Like Froth Floating on the Sea: The World of Pirates and Seafarers in Late Imperial South China*, Institute of East Asian Studies, Berkeley: University of California, 2003.
- (9) 拙稿「閩粵沿海民の活動と清朝——一九世紀前半のアー貿易活動を中心に」『東方學報』京都七五、二〇〇三年、二〇五—二二八頁。
- (10) 拙稿「清朝と漢奸——アヘン戦争時の福建・廣東沿海民對策を中心に」森時彦編『中國近代化の動態構造』（京都大學人文科學研究所、二〇〇四年）。
- (11) 『宮中檔道光朝奏摺』（國立故宮博物院藏）第十七輯（〇〇九一二〇）二一九—二二一頁、閩浙總督劉韻珂などの道光二十六年四月二十八日の上奏「窃照閩省漳泉等府、地處沿海、俗尚兇頑、其間無業之徒、往往出洋爲盜。而泉州府馬巷廳所屬之陳頭、柏頭等鄉、尤爲盜賊淵藪。該匪徒等每於春夏之交、輒借捕魚名色、招集無賴、整備船隻器械、分赴閩浙各洋、四出剽掠、及至冬間、則各潛歸巢穴。歷久相沿、幾同習慣。」
- (12) 『宮中檔道光朝奏摺』第十九輯（〇一〇一六〇）六五—六六頁 福建水師提督寶辰彪の道光二十七年三月二十二日の上奏。
- (13) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第四輯（〇〇一〇二六）七〇〇頁 福建水師提督鄭高祥の咸豐二年四月十一日の上奏。
- (14) イギリス領事も、廈門で最も低い階層の人々が海賊に參加しているとみなしている。FO228/98 Layton to Bonham, No.33, October 26, 1849.
- (15) Murray, *op.cit.*, p.6, 張中訓「清嘉慶年間閩浙海盜組織研究」中央研究院三民主義研究所中國海洋發展史編輯委員會編『中國海洋發展史論文集』第二輯（中央研究院三民主義研究所、一九八六年）、安樂博（Robert J. Antony）「罪犯或受害者：試析一七九五年至一八一〇年廣東省海盜集團之成因及其成因之社會背景」湯熙勇主編『中國海洋發展史論文集』第七輯（中央研究院中山人文社會科學研究所、一九九九年）四四六頁。
- (16) 前掲拙稿「清朝と漢奸」七—八頁。
- (17) 『宮中檔道光朝奏摺』第十九輯（〇一〇五〇七）五五六—五六〇頁、署閩浙總督徐繼畲の道光二十七年六月二十七日の上奏。
- (18) 宮田道昭「一九世紀後半期、中國沿岸部の市場構造——「半植民地化」に關する一視點」『歷史學研究』五五〇、一九八六年、七頁。
- (19) 中國第一歷史檔案館編『鴉片戰爭檔案史料』（天津古籍出版社、一九九二年）第七冊、四一〇頁「閩浙總督劉韻珂等奏爲設法稽查廈門貨船偷漏走私情形片」（道光二十四年

二月初八日「軍機處錄副奏摺」、以下「軍錄」と略稱）「茲據該司查有何厝鄉、卓崎、深鵝等處、均在廈門口外、水陸交通、從前內地商船販貨赴廈、各該處間有勾通走漏之事。

內何厝鄉人戶衆多、民情獷悍、較卓崎等處尤甚。自夷人至廈互市、該鄉奸民以爲有利可圖、即開設私行、置造船隻、希圖勾串夷船、於口外卸貨走私。因開市不久、各夷船皆直駛入口、該鄉奸民未能即與各夷勾結、尙無走漏之事。」

(20) 開港後の廈門では「密輸」が横行していた。Fairbank, op. cit., pp. 347-350.

(21) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第四輯（〇〇一七一一）一六三—一六五頁、閩浙總督季芝昌等の咸豐元年十二月十八日の上奏。

(22) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第四輯（〇〇一七一一）一六六—一六五頁、閩浙總督季芝昌等の咸豐元年十二月十八日の上奏附奏。

(23) 福建水師の船隻数は二百數十隻以上、兵額は約三萬人で清朝水師の中でも最大の規模であった。王家儉『清代的綠營水師（一六八一—一八六四）』『近代中國海防—軍事與經濟』（香港中國近代史學會、一九九九年）二〇一—二〇三頁。

(24) 張集馨撰『道咸宦海見聞錄』（中華書局、一九八一年）六三頁「漳郡城外有軍功廠、每月派遣督造戰船一隻、以爲駕駛巡緝之用。其實水師將船領去、或賃與商賈販貨運米、或賃與過臺往來差使、偶然出洋、亦不過寄碇海濱而已、從無緝獲洋盜多起之事。水師與洋盜、是一是二、其父爲洋盜、

其子爲水師、是所恒有。水師兵丁、誤差革退、即去而爲洋盜、營中招募水師兵丁、洋盜即來入伍、誠以沙線海潮、非熟悉情形者不能充補。」

(25) 『道咸宦海見聞錄』六三頁。

(26) 『鴉片戰爭檔案史料』第四冊、二三六頁「閩浙總督顏伯燾奏報定海鎮海失守閩防兵單不能赴援情形摺」（道光二十一年九月初八日「軍錄」）「至於福建通省海口最要次要不下六七十處、在在需兵防守、本省兵額無多、陸路不敷分派。是以多募鄉勇爲助、水路則哨船止可擊盜、萬不能當夷船之砲火。而臣所造之船隻四十餘號、逆夷闖進廈門後悉被燒焚、大小各砲亦被推入海內、此時船砲俱無、水師亦難以前赴。」

(27) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第三輯（〇〇一三七七）四七三—四七七頁、閩浙總督裕瑞の咸豐元年十月初十日の上奏。

(28) FO228/71 Layton to Davis, No.62, July 19, 1847.

(29) FO228/98 Layton to Bonham, No.30, October 13, 1849.

(30) FO228/98 Enclosure in Layton to Bonham, No.30, October 13, 1849.

(31) FO228/71 Layton to Davis, No.98, December 21, 1847.

(32) FO228/98 Layton to Bonham, No.13, June 9, 1849.

(33) イギリス外交文書中では通常 West Coast Boat と記されるが、Cantonese Lorch'a と譯される場合もあり、譯語は一定せず、廣義には廣東船となる。

(34) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第六輯（〇〇一七九六）一九三—

一九四頁、閩浙總督李芝昌等の咸豐二年十一月初七日の上奏附片。

- (35) 『宮中檔道光朝奏摺』第十九輯（〇一〇一三五）三〇～三四頁、閩浙總督劉韻珂の道光二十七年三月十七日の上奏。
- (36) 中國第一歷史檔案館編『嘉慶道光兩朝上諭檔』（廣西師範大學出版社、二〇〇〇年）第五二冊、二〇三頁、道光二十七年六月初四日の上諭。
- (37) 前掲拙稿「清朝と漢奸」一三三頁。
- (38) Fox, *op. cit.*, pp.97-101.
- (39) 『宮中檔道光朝奏摺』第十九輯（〇一〇一三五）三〇～三四頁、閩浙總督劉韻珂の道光二十七年三月十七日の上奏。
- (40) Fairbank, *op. cit.*, pp.227-232.
- (41) 福建沿海では一八五三年十一月に漳州灣でイギリス船がイムクンを強奪する事件が発生した。FO228/155 Incl. 1 in Robertson to Bonham, No.103, December 1, 1853.
- (42) Fairbank, *op. cit.*, pp.243-246, FO228/70 Layton to Davis, No.15, February 9, 1847.
- (43) FO228/70 Layton to Davis, No.16, February 9, 1847.
- (44) FO228/70 Layton to Davis, No.38, March 29, 1847. なおイギリス海軍艦艇の艦種については J.J. Colledge, *Ships of the Royal Navy: The Complete Record of all Fighting Ships of the Royal Navy*, London: Greenhill Books, 2003, を参照した。
- (45) FO228/71 Layton to Davis, No.62, July 19, 1847.
- (46) Fox, *op. cit.*, pp.101-105.
- (47) イギリス政府の報獎金以外にも、清朝官僚の贈り物や外國政府・商人からの報獎金も存在した。Fox, *op. cit.*, pp.137.
- (48) FO228/98 Layton to Bonham, No.33, October 26, 1849.
- (49) FO228/111B Layton to Bonham, No.4, January 15, 1850.
- (50) FO228/98 Layton to Bonham, No.30, October 13, 1849.
- (51) Gerald S. Graham, *The China Station: War and Diplomacy 1830-1860*, Oxford: Clarendon Press, 1978, pp.273-275.
- (52) FO228/98 Layton to Bonham, No.13, June 9, 1849.
- (53) FO228/98 Layton to Bonham, No.30, October 13, 1849.
- (54) FO228/98 Encl. 11 in Layton to Bonham, No.13, June 9, 1849.
- (55) FO228/141 Sullivan to Bonham, No.10, February 11, 1851.
- (56) FO228/98 Layton to Bonham, Separate, August 9, 1849. イムクン戦争後、商船の減少や外國米の福建流入により、一時的に臺灣米の福建への移出量が減少していたと思われる。高銘鈴「一九世紀前・中期における臺灣米の流通に關する一考察」『東洋學報』八五—二、二〇〇三年、一〇

七～一〇八頁。このほかに海賊の影響も考慮すべきであろう。

- (57) パイロットの活動に對しては廈門の官僚だけではなく、廈門の住民も貿易への援助と同胞の解放に感謝していた。FO228/98 Layton to Bonham, No.13, June 9, 1849. ちろん、イギリス領事がイギリス海軍と自らの役割を強調していることを考慮する必要がある。

- (58) FO228/71 Layton to Davis, No.98, December 21, 1847; FO228/98 Layton to Bonham, No.13, June 9, 1849.

- (59) FO228/155 Incl. 1 in Robertson to Bonham, No.103, December 1, 1853.

- (60) FO228/171 Incl. in Sinclair to Bowring, No.41, July 1, 1854.

- (61) 一八〇九年に海賊連合の規模は千八百隻、七萬人に達したと云う。Murray, *op. cit.*, p.76.

- (62) 嘉慶海寇において一八〇五年に成立した廣東の海賊の同盟は七人（のち六人）の首領の率いる艦隊から構成されていたが、その艦隊は各七十～二百隻の規模をもったが、その艦隊も十～四十隻の小艦隊から構成されていた。*Ibid.*, pp.60-61.

- (63) 廈門小刀會の反亂の経緯については下記の文献を参照。佐々木正哉「咸豐三年廈門小刀會の叛亂」『東洋學報』四五一四、一九六三年、黃嘉謨「英人與廈門小刀會事件」『中央研究院近代史研究所集刊』七、一九七八年。歸國華

僑と小刀會については拙稿「五港開港期廈門における歸國華僑」『東アジア近代史』三、二〇〇〇年を参照。

- (64) *China Mail* (以下CMと略稱), August 11, 1853, p.130.

- (65) FO228/155 Backhouse to Bonham, No.60, August 31, 1853.

- (66) 李廷銓は同族や團練を率いて小刀會鎮壓に参加して功績を挙げたとされる。上海師範大學歴史系中國近代史研究室・中國第一歴檔案館編輯部編「福建・上海小刀會檔案史料匯編」（福建人民出版社、一九九三年）一六九頁、「內閣明發賞給在廈協助鎮壓小刀會有功之已革提督李廷銓二品頂戴上諭」（咸豐三年九月初六日「軍機處上諭檔」）なお、李廷銓は嘉慶海寇鎮壓で活躍した李長庚の養子である。

- (67) 中國第一歴史檔案館編『清政府鎮壓太平天國檔案史料』（社會科學文獻出版社、一九九三年）第九冊、四四七頁「王懿德奏請准紅單船暫留閩省合剿片」（咸豐三年八月二十五日「軍錄」）「查前項艇船、前於六、七月兩月路過福建、遵旨協同水師攻剿賊匪。該艇船砲堅利、弁兵勇敢、與原任提督李廷銓自帶族衆、爲水陸犄角乃勢、均爲逆匪畏懼。今江南軍務緊要、雇募艇船、本爲剿平粵逆、自應飭令飛駛應援。惟廈門剿匪正在得手、摧堅據險、已入重圍、從此兩路夾攻、可期擒渠。若遽將艇船撤退、誠恐匪欲復張、兵心漸玩、於全局大有關係。…」

- (68) 「福建・上海小刀會檔案史料匯編」一七二～一七三頁「寄諭福建巡撫王懿德著飭廣東紅單船迅駛江南不得久留閩省」（咸豐三年十月初九日「軍機處上諭檔」）にあるように、

紅單艇を至急江南に移動させるように上諭が下されたが、後述のようには廈門奪回まで使用されてゐる。

- (69) FO228/155 Robertson to Bonham, No.93, November 14, 1853.
- (70) FO228/155 Robertson to Bonham, No.103, December 1, 1853.
- (71) CM, December 15, 1853, p.202.
- (72) FO228/171 Parks to Bowring, No.51, July 31, 1854.
- (73) 黃位の勢力は鶏籠占領直後に清軍に撃退されつつある。FO228/171 Parks to Bowring, No.78, November 22, 1854。『福建・上海小刀會檔案史料匯編』一九四～一九五頁「署臺灣鎮總兵邵連科等奏剿辦鷄籠等地小刀會船隊情形及鎮壓斗六門、岡山起事片」(咸豐五年十二月初一日「軍錄」)。
- (74) FO228/171 Parks to Bowring, No.78, November 22, 1854.
- (75) FO228/171 Parks to Bowring, No.86, December 12, 1854.
- (76) 前掲拙稿「五港開港期廈門における歸國華僑」一二一〇～一二二頁。
- (77) FO228/98 Layton to Bonham, No.18, July 12, 1849.
- (78) ADM125/3 Vansittart to Seymour, October 5, 1858.
- (79) FO228/285 Encl. 1 in Gingell to Bruce No.68, September 6, 1860.
- (80) 寧波でもボルトガル船の海賊行爲はしばしばみられた。

Fairbank, *op.cit.*, pp.341-342.

- (18) ADM125/1 Hand to Seymour, April 24, 1857; ADM125/1, Hand to Seymour, June 2, 1857.
- (32) Graham, *op.cit.*, p.284.
- (33) FO228/188 Parks to Bowring, No.6, January 5, 1855.
- (84) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第三輯(〇〇一三七七)四七三～四七七頁 閩浙總督裕瑞の咸豐元年十月初十日の上奏「……並聞該匪等銷贓聚會、俱在廣東香山縣之澳門、香港及浙江之石浦、溫州等處。其船內多帶私貨、難保不爲商船赴各處口岸銷售。」
- (85) ただし、開港場である寧波そのものが開港後に海賊の根據地となっていたことも重要だろう。Fairbank, *op.cit.*, pp.329-346.
- (86) FO228/98 Layton to Bonham, No.33, October 26, 1849。『大清文宗顯皇帝實錄』卷四十二「咸豐元年閏八月甲戌の條によると、一八五〇年にも、黃富興が以前雇募した廣東夾板船が浙江石浦沖合で海賊行爲を行っているが、その後、黃富興が處罰された形跡はない。
- (87) 『清代官員履歷檔案全編』(華東師範大學出版社、一九七七年)第二卷、六六六頁。
- (88) 鄭高祥の堂叔臺灣水師協標右營守備も潮州人であった。『宮中檔咸豐朝奏摺』第四輯(〇〇一九一六)五〇一～五〇二頁、閩浙總督季芝昌の咸豐二年二月二十一日の上奏。
- (89) FO228/251 Morrison to Bowring, No.76, August 18,

1858.ただし、當該期の福建水師提督楊載福（岳斌）は湖南省善化出身で湘軍の幹部として對太平天國戰に従事しているので、當時金門鎮水師總兵官であつた陳國泰（廣州人）等を指している可能性が高い。

- (90) 例へば盛京將軍奕興は、一八五一年に山東登州鎮守備であつた先述の黃富興に命じて廣艇四隻を三ヶ月雇用し、その後、廣東で廣艇を建造させて水勇を雇募し、金州の水師の兵丁・水手に技藝を學ばせている。『宮中檔咸豐朝奏摺』第七輯（〇〇三三四）二〇二—二〇四頁、奕興の咸豐三年正月三十日の上奏。ただし、一八五四年に海賊が浙江海上で多發したことにより、寧波の商人らが廣東で西洋式蒸汽船を購入したのを手始めとして（『宮中檔咸豐朝奏摺』第十三輯（〇〇六四九六）五〇八—五一〇頁、浙江巡撫何桂清の咸豐五年八月初三日の上奏）、沿海各地の商人達が護衛用に蒸汽船を購入する事例もみられるようになる。
- (91) FO228/171 Parks to Bowring, No.61, September 21, 1854.
- (92) FO228/171 Parks to Bowring, No.61, September 21, 1854.
- (93) FO228/188 Winchester to Bowring, No.26, February 2, 1855.
- (94) FO228/171 Parks to Bowring, No.71, October 23, 1854.
- (95) 例へば、一八五五年八月に、盛京の復州娘娘宮海口で清朝水師に撃破されて逮捕された海賊の梁阿狗の自白による

と、梁の搭乘していた船は廣東省番禺縣出身者から構成され、廣東省電白縣洋面、福建省沙城洋面、浙江省洋面、山東省大石頭海口、奉天沒溝營海口で海賊行爲を行つていた。『宮中檔咸豐朝奏摺』第十五輯（〇〇七六一—〇七七二頁、承志等の咸豐六年二月初四日の上奏。

- (96) FO228/188 Inclsure in Backhouse to Bowring, No.65, June 27, 1855.
- (97) 福州においては貨物船が護衛のために廣艇を雇用してゐた。『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十六輯（〇一二五九七）一〇七—一〇九頁、閩浙總督慶瑞の咸豐十年六月二十五日の上奏。
- (98) イギリス領事は「この要請を拒否しよう」。FO228/155 Backhouse to Bonham, No.102, November 29, 1853.
- (99) FO228/171 Parks to Bowring, No.86, December 12, 1854.
- (100) FO228/188 Winchester to Bowring, No.26, February 2, 1855.
- (101) FO228/188 Winchester to Bowring, No.30, February 13, 1855.
- (102) FO228/188 Backhouse to Bowring, No.65, June 27, 1855.
- (103) FO228/188 Parks to Bowring, No.7, January 6, 1855.
- (104) 中央研究院近代史研究所編『四國新檔（一）英國檔上』（中央研究院近代史研究所、一九六六年）二六五頁「咸豐

六年七月初七日、王懿德、呂佺孫奏。窃據叻咭喇夷酋咆哮照會、以海盜在於五港通商往來洋面、肆行劫掠、雖經派調師船、痛加殲剿、尚未足收全效。現擬每年冬春兩季、由江省吳淞派出師船一隻南駛、沿經寧波、福州、廈門、香港、黃埔各處、夏秋兩季、由粵省黃埔派出師船一隻、沿經香港、廈門、福州、寧波、吳淞各口。飭令該師船、凡有盜匪潛踞、擾害商艘、嚴行剿洗、以期肅清等由前來。隨經臣王懿德、以閩浙兩省水師管轄各洋面、雖遼闊縣長、不無盜匪乘機肆劫、業已檄飭該管鎮將、各率舟師、常川哨巡、合力截剿。續據閩浙水陸各文武、先後在洋攻捕擒獲各起洋盜多名、可毋須該夷幫同剿捕、照覆遵辦。……」。松浦章前掲書、一五六―一五八頁は『籌辦夷務始末』の當該の記事を參照しているが、師船を清朝の軍船と解釋するなどの誤りがみられる。

- (105) FO228/188 Backhouse to Bowring, No.65, June 27, 1855.
- (106) 例えば一八五六年五月に英艦ビターンが石浦附近で拿捕した廣東ジャンクについて福州知府が商船としてその解放を主張しつ問題となった。FO228/215 Medhurst to Bowring, No.32, May 9, 1856.
- (107) FO228/211 Backhouse to Bowring, No.20, February 8, 1856.
- (108) FO228/233 Morrison to Bowring, No.20, April 3, 1857.
- (109) Graham, *op. cit.*, pp.285-286.

(110) 一八五五年から一八五六年にかけて海路で行われた漕運護衛を目的に寧波や上海の商人の購入した蒸氣船は奉天から浙江の沿海で廣艇を中心とする海賊船に大きな打撃を与えたとされる。『宮中檔咸豐朝奏摺』第十六輯（〇〇八一―一〇七三五―七七七頁、浙江巡撫何桂清の咸豐六年五月初三日の上奏）。

(111) 咸豐九年二月二十九日に莆田縣の湄州沖合で海賊を掃討するのに雇用した廣艇が使用された。『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十三輯（〇一五六九―七六八―七六九頁、閩浙總督慶端等の咸豐九年十二月十五日の上奏）。

(112) 福建人（漳泉人）と騷擾を引き起こして南臺で砲撃を行った廣艇はその後福州を發った。『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十六輯（〇一二五九七―一〇七―一〇九頁、閩浙總督慶端の咸豐十年六月二十五日の上奏）。

(113) 七月に廣艇は瑞安、温州を襲撃して撃退されている。『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十六輯（番號なし）一一一―一四頁、閩浙總督慶端の咸豐十年六月二十五日の上奏。

(114) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十七輯（〇一三三四―五六〇―六六三頁、閩浙總督慶端の咸豐十一年十月二十四日の上奏。FO228/289 Incl. 1 in Medhurst to Bruce, No.95, November 23, 1860.

(115) 廈門に海賊が接近、イギリス艦の福州から廈門回航を要請。FO228/125 Sullivan to Bonham, No.53, August 7, 1851.

(116) 一八四七年から一八五六年にかけて、中國ステーション

及び東インドステーションに配備された軍艦数は十八—十三隻に過ぎなかった。Fox, *op.cit.*, p.195.

- (117) FO228/155 Incl.2 in Robertson to Bonham, No.111, December 22, 1853.

- (118) 一方、イギリス側は關與に慎重であつた。FO228/171 Parks to Bowring, No.80, November 27, 1854.

- (119) FO228/285 Gingell to Bruce No.71, September 9, 1860.

- (120) 實際には、海賊を追撃する際には領海は無視しており、時には上陸して、表の一八五八年九月の事例にもみられるように海賊活動を行う村落などを攻撃した。

- (121) FO228/171 Incl. 1 in Parks to Bowring, No.51, July 31, 1854.

- (122) FO228/171 Incl. 2 in Parks to Bowring, No.51, July 31, 1854.

- (123) FO228/171 Parks to Bowring, No.51, July 31, 1854.

- (124) 實際には、武装した閩南の村落への介入は困難であつた。例えば一八五二年十一月、盜賊活動が頻發する晉江縣太沖郷に向かつて地方官と武官が住民の攻撃を受け兵隊と雜役夫四名が殺害される事件が発生した。『宮中檔咸豐朝奏摺』第六輯(〇二七九六)一九二—一九三頁、閩浙總督李之昌等の咸豐二年十一月初七日の上奏。

- (125) FO228/265 Morrison to Bowring No.12, February 11, 1859.

- (126) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十三輯(〇一三四五)三九

四—三九六頁、閩浙總督慶端の咸豐九年十一月初三日の上奏。

- (127) 『宮中檔咸豐朝奏摺』第二十四輯(〇一二〇九七一)八五二—八五三頁、閩浙總督慶端の咸豐十年三月二十八日の上奏。

- (128) これは、地方官の械闘への介入が消極的であつたことと共通する。

- (129) 天津條約第十九條にはイギリス船が被害にあつた場合の清國側の海賊取締り、第五十二條には海賊鎮壓するイギリス軍艦の補給の便、第五十三條には中英の共同による海賊鎮壓についての規定が盛り込まれた。

- (130) はば同時期に東南アジアにおけるイギリス海軍を中心とする海賊掃討活動が行われていたことも注目され、その連動は検討課題である。

- (131) Fox, *op.cit.*, p.67.

- (132) 中國の汽走海軍に關しては以下を参照。Richard N J Wright, *The Chinese Steam Navy 1862-1945*, London: Chatham Publishing, 2000.

〔附記〕 本稿は、東南アジア史學會第七一回研究大會における「一九世紀中葉、南シナ海沿海秩序の再編——イギリス海軍と閩粵海盜」(二〇〇四年六月十二日、於東京大學)と題した報告を基礎にして執筆した。また本稿は平成十六年度文部科學省科學研究費補助金(若手B)による研究成果の一部である。

THE REORGANIZATION OF THE MARITIME ORDER IN SOUTHERN CHINA: THE BRITISH NAVY AND PIRACY IN SOUTHEASTERN CHINA

MURAKAMI Ei

Although the piracy that had broken out during the Opium War threatened trade at treaty ports after the war, there has been a lack of interest in this piracy and few studies of the issue have been conducted. The problems of these previous studies are that they have been unable to situate this piracy historically in due factors such as the disjunction between Ming and Qing history and modern Chinese history, that studies of the British Navy have been uniformly biased toward a diplomatic approach, and that limited number of historical sources have been used. This study aims to fill this major lacuna in the field and also place the piracy of the mid nineteenth century in the context of the long-term history of maritime regions. The study deals with southern part of Fujian and employs both written records in English from the British Foreign Office and Admiralty and records in Chinese as well.

The concentration of trade into the treaty ports after their opening struck a blow to those who were engaged in the opium trade in coastal regions and invited a great increase in piracy. Increases in acts of piracy in turn invited the intervention of the British Navy, and it began operations to crackdown on piracy using the treaty ports as bases of operations. As a result it became impossible to conduct piracy on a large scale, and pirate bands were suppressed by the end of the decade of the 1840s.

Amidst the deployment of the British Navy, the pirates of Fujian lost the power that they had amassed since the Song Dynasty as a result of the anti-piracy operations of the British Navy, the spread of Cantonese power, and the defeat in the revolt of Small Sword Society 小刀會, etc. On the other hand, Cantonese pirates increased their power along the entire coast due to their relations with Westerners, their use of secure bases, their participation in the Qing navy, and the cooperation of Cantonese merchants. This new power reached its peak by the middle of the 1850s.

In contrast the British Navy, using the treaty ports that were established with cooperation of local bureaucrats as bases, as in Amoy, suppressed the Can-

tonese pirates, insured the safety of Western trading vessels that plied the treaty ports, and promoted the concentration of previously dispersed trade into the treaty ports. This was then expanded to other treaty ports. As a result, by using the British Navy, the Qing Government was able to subdue Fujian pirates, and later suppress Cantonese pirates and achieve a revival of order in coastal areas. It appears that by using the British Navy, the Qing Government was able to firmly revive coastal order and incur a financial burden smaller than that which would have been required to co-opt Chinese pirates on its own.

A VIEW FROM THE SEA: THE NORTHERN VIETNAMESE COAST IN A REGIONAL CONTEXT

Li Tana

For too long Vietnam has been regarded as a land based polity amongst the mainland Southeast Asian countries, and as a series of autonomous villages located on the plain, with only simple exchanges in village markets and having little to do with either the mountains or the sea. This agrarian society provided the perfect environment for Confucianism, which melted into its soil and formed an integral part of Vietnam's social fabric. This article challenges the perceived image of "traditional" Vietnam by viewing Vietnamese history from the sea, suggesting that a trading zone existed in the Gulf of Tongking area from the 12th to the 15th centuries and arguing that commerce and the mixing of peoples of this trading zone formed a crucial part of the foundation of the early Vietnamese states.

This sea view allows the author to revisit the historical connections between Dai Viet, Champa, and Hainan Island. Scholars have presented Dai Viet as an entity under Chinese influence, Champa as one sharing Indian culture, and Hainan as a remote backwater in the middle of nowhere. Although located next to each other physically, the three have been seen as isolated localities that shared little, whether culturally or economically. Recent scholarship of the last few decades and the historical evidence this article tries to draw together, suggest a much more integrated region than previously perceived. Such a sea view also reveals a different map of ethnicity around the Gulf of Tongking area, in which the non-Viet, the Chams and the Chinese, all played an important part in making its history and added vitality to this region. These traces were eradicated both by tide and time, and by the prejudices of later Confucian historians, whose skepticism towards